

カリキュラムとGraduation Policy(GP)との相互依存関係一覧表

記入者名	教育学部
記入年月日	2006年4月1日
存続/廃止科名	健康科学教育課程
学科/専攻等名	健康科学教育課程
コース等名	生活健康科学コース

教育学部の教育目的(具体的に記述・箇条書き)		健康科学教育課程の教育目	生活健康科学コースの教育目的
学校教育および社会のさまざまな分野において教育の素養をもって貢献できる人材の養成を目的とする。		人と健康の関わりについて、運動面、生活面から科学的視点に立つて理論的、実践的に学習し、心身ともに健康な生活を送る。	人間の健康な生活における衣食住に関心をもち、この分野で教育や社会の幅広い場面に貢献できる人材を育成する。
健康科学教育課程生活健康科学コースのカリキュラム		健康科学教育課程のGraduation Policy(GP) (◎=GP達成のために、特に重要な事項、○=GP達成のために、重要な事項、△=GP達成のために、重要な事項、□=GP達成のために、重要な事項)	生活健康科学コースのGraduation Policy(GP) (◎=GP達成のために、特に重要な事項、○=GP達成のために、重要な事項、△=GP達成のために、重要な事項、□=GP達成のために、重要な事項)
授業科目名	授業科目の主題(箇条書き) (この授業科目における中心となる 題目・問題・テーマ等を箇条書きに記 入する。)	授業科目の到達目標(箇条書き) (この授業科目の学習後に到達すべき 最低限の(行動)目標を学生が主語で 行為動詞を使用して箇条書きに記入 する。)	到達目標
総合演習	人類に共通する課題や日本社会に関わる課題について学ぶ。	1. 人類や日本社会の課題を理解し、説明できる。 2. 上記の課題を分析・検討し、自分の意見を持つことができる。 3. 上記の課題についての自分の意見を相手に応じて分かりやすい形で伝えることができる。	10 20 30
健康科学概論	健康と密接に関わる運動、食生活および住居に関する今日の課題を取り上げ、問題点や対応策などを考察して、「健康」について考える基本的な姿勢・視点の構築をする。	1. 健康と運動のかかわりについて説明できる。 2. 健康と食生活のかかわりについて説明できる。 3. 健康的な住生活について説明できる。 4. 健康と運動のかかわりについて考察できる。 5. 健康と食生活のかかわりについて考察できる。 6. 健康と住生活のかかわりについて考察できる。 7. 運動に関心を広げ、実践できる。 8. 食生活に関心を広げ、健康的な食生活を実践できる。 9. 住生活に関心を広げ、健康的な住生活を実践できる。 10. 健康について主体的に改善をはかろうとする。	10 20 30 40 50 60 70 80 90 100
発育発達老化学	小児は、大人の縮小版ではない、ということを知る。これは、健康問題について考える場合、加齢の過程を正しく認識することが重要であることを示唆するものである。同時に、教育の領域においても然りである。本講義では、乳児期から高齢期までの間に見られる形態や機能の変化について概説する。	1. 乳児期から高齢期までの間に見られる形態や機能の変化についての概説を説明できる。 2. 授業で取り上げた項目について、運動指導などの関わり合いからの見方・考え方ができる。 3. 構造的・機能的発育発達経過の観点から人体に関心をもち、	1Δ 20 30
老年心理学	高齢者に接しようとする者は、高齢者の心理状態を理解することで適切な援助を行うことができる。高齢者の主観的体験と客観的状況を理解するとともに、高齢者に関わる者の心状態にも視野を加えることで、老年というものを多面的に検討して行く。	1. 高齢者の心理的変化を説明できる。高齢者とその関係者の心理的変化を説明できる。 2. 高齢者との関係の持ち方を工夫できる。 3. 高齢者と抵抗感や関わり合いがなくなることを目指すことができる。 4. 高齢者の立場で物事が判断できる。	2Δ 3Δ 4Δ
人体構造概論	身体を構成している部分の構造と形態(解剖学)、そして部分の働き(生理学)について、特に身体運動に関わり深い骨格と筋について概説する。	1. 身体を構成する各レベルについて説明できる。 2. 骨格と筋系について説明できる。 3. 細胞の概観と人体にみられる組織について説明できる。 4. 骨格系と筋系について説明できる。 5. 授業で取り上げた項目について、運動との関わり合いからの見方・考え方ができる。 6. 構造的・機能的観点から人体に関心をもち、	1Δ 4Δ 50
環境生体適応学	暑熱、高圧(潜水)などの諸環境に対して、生体が起こる反応、適応、その生理的メカニズムなどについて講義する。	1. 諸環境に対して、生体が起こる反応、適応、およびその調節機構について説明できる。 2. 各環境下において、生体の適応を促す方法、および注意すべき事項について説明できる。 3. 諸環境に対する生体適応などについて関心をもち、	10 20 30
生活化学	無機化学・有機化学・物理化学など、化学領域全般に渡る基礎を、教職現場での理科指導を志望し、広く講義する。	1. 無機化学・有機化学・物理化学の基礎的知識を理解し、説明できる。 2. 物質の構造やその変化について、化学的な見方ができる。 3. 化学的諸事象に関心をもち、理科教育の観点からも関心をもち、	1Δ 20 30 3Δ
生活の有機化学	有機化学の基礎となる分子の性質や化学反応性について説明する。また日常の身近な事象を題材に、生活環境と化学の関連や概念との関連づけができるように解説する。	1. 基礎的な有機分子の命名法を理解し説明できる。 2. 有機分子の構造や反応性を説明できる。簡単な生体分子について理解し、その構造や機能について説明できる。 3. 有機化学物質の構造や反応を「電子の流れ」によって説明できる。 4. 身の回りの物質や日常生活の現象を化学物質の性質と関連づけで説明できる。 5. 日常生活における現象や物質について科学的な見方ができるようになることで、理科教育における児童・生徒の生活経験に即した物質観の育成に寄与できる。	3Δ
栄養科学	先ずは生命、生命と細胞のしくみを学び、ついでタンパク質、糖質、脂質、ビタミン、ミネラルの五大栄養素の代謝やその体内での機能や栄養価について学ぶ。また、食物繊維などについても学ぶ。さらに、電子栄養学などを行い、現代の食生活の抱えている問題や課題について考える。	1. 細胞の仕組みや生体の主な機能(例えば、消化吸収・エネルギー生成など)について説明できる。 2. 五大栄養素や食物繊維の役割を説明できる。 3. 個々の知識を総合して、食と健康の問題を考えられる。 4. 自身の食生活や現代の食の問題等と比較して考える。	10 20 30 40
栄養科学II	この授業では、先ず、栄養と病気の基本的な関わりを学ぶ。ついで、幼児期・児童期・若年期までの各ライフサイクルにおける栄養学的特徴について理解する。さらに、おとな生活習慣病について、食生活との関連を通して学習する。	1. 各ライフサイクルの栄養的特徴を理解し、説明できる。 2. 生活習慣病について理解し、説明できる。 3. 実際の生活状況と生活習慣病との関連を考察することができる。 4. マスコミやインターネットで垂れ流し状態になっている「食と健康」にかかわる情報を批判的に検討できる。 5. 授業を通して、食と健康の問題をさらに発展的に考え、問題意識を高める。	20 3Δ 4Δ
運動栄養学	この授業では、基礎的栄養学を土台に、先ず、骨格の構築と栄養素との関係や学習し、次に、2大栄養素(エネルギー代謝を含む)との関係、ウェイトコントロールと栄養との関係、疲労回復と栄養との関係等について学び、運動と栄養の関係を考察する。	1. 栄養と運動の関係を理解し、より具体的に説明できる。(スタミナと栄養の関係、疲労回復と栄養関係など)	10
病態栄養学	疾病構造の要素を概観し、生活習慣病の要因構造について述べる。その上で各生活習慣病のメカニズムや発症するメカニズムや生活習慣病の発症するメカニズムを、生活化学および栄養学的観点から概説する。	1. 各生活習慣病の原因について理解し、説明することができる。 2. 生活習慣の異常、改善がどのような変化をもたらすかを推察することができる。 3. 生活習慣と疾病の関連について関心をもち、自ら学ぶ姿勢が見られる。 4. 生活習慣と疾病の関連について解説し、その改善と効果について考察できる。	10 20 3Δ 40

栄養科学実験	この授業では、先ず、簡単な実験器具や食品等の取り扱い方など基礎的な実験の基礎技術について学習し、ついで各栄養素を題材に、それぞれの生物学的、科学的特性を、実験を通して体得する。さらに食生活衛生の立場から、微生物に関する実験や食品添加物の検出実験等を行う。	1. 各実験について、原理までしっかりと理解し、説明できる。 2. 各実験に使われている器具、試薬などについてその役割や意味を説明できる。 3. 実験を通して栄養学的、食品科学的、食生活衛生学上の興味心を持つ。 4. それぞれの実験に対して、技術の習得だけでなく、その原理的内容についても把握する。また、他人に対して協力的、建設的態度がなれる。 5. 基礎的な化学実験、生物学実験の技術をマスターし、使用できる。	30				10 20 30 40 50	
食生活科学概論	「食」の語は、自然条件、社会、経済条件によって形成された文化である。本講義では、世界および日本の食文化について講義する。	1. 食文化とは何かについて説明できる。 2. 世界および日本の食文化について理解する。 3. 食文化の研究の意義を理解する。 4. 食文化に関する自分の意見を論理的に述べることができる。 5. 食に関する関心を広げ、問題意識を高めることができる。 6. 日常生活の中で、食文化の問題について主体的に考えようとする。	10 20 50 60				10 20 30 40 50 60	
食品科学	食品素材について、その特徴および調理特性について習得する。	1. 食品素材の成分の特徴を理解し、説明できる。 2. 食品の調理特性を理解し、説明できる。 3. 調理操作の目的と特徴を理解し、説明できる。 4. 食品素材とその調理特性を関連づけることができる。 5. 日常生活のなかで、食品と調理に科学的な関心を持つ。	10 20				10 20 30 40 50	
食品加工学	私たちの身のまわりには、多くの種類の加工食品がふりまわっている。食品加工工程の原理と、各論として農産加工食品や畜産加工食品などについて説明する。	1. 食品の加工の原理を理解する。 2. 加工食品について説明できる。 3. 加工食品について、自分の意見を述べることができる。 4. 伝統的な加工食品、新しい加工技術に関心をもつ。 5. 加工食品について、主体的に考えることができる。	10 20 50				10 20 30 40 50	
食品衛生学概論	我々の健康の源である食物の安全性については、古来より最も重要な課題の一つである。近年、その食物の生産、製造における種々の変遷がその課題をより複雑なものにしていく。この授業では食の安全をテーマに種々の角度から考える。	1. 四大食品公害事件の概要と問題点を説明できる。 2. 代表的な細菌性食中毒について説明できる。 3. 食品添加物についてベネフィット・リスク論を構築できる。 4. クロウニング技術、環境ホルモンなど新しいテーマについて説明できる。 5. 食品の安全性について、種々の問題点をより深く理解し、総合的に食の安全性について考えることができる。 6. 日常生活との関わりの中で、食の安全性を考慮することができるようになる。 7. 個人個人の食の安全への関心・意識の高まりが、社会全体の「食の安全性」の監視状況を強化することにつながることに気づき、日常生活の中で、自然な形で、その関心・意識が実際の食生活へ反映できるようになる。 8. 食の安全性については、個人個人がどのように考えようとするかに関心する。授業中のディベートを通して、自らの意見を正論に相手にならざるを得ない。	10 20 30 40 50 60 70 80					10 20 30 40 50 60 70 80
食品科学実習	食品素材の成分と調理特性を踏まえ、基礎的な調理技術、知識を習得するとともに、簡単な食品加工実習を行う。	1. 実習の目的を理解する。 2. 食品の調理特性を理解する。 3. 調理および加工の方法を理解する。 4. 実習を通して、食品・調理への関心を高める。 5. 実習に積極的に参加する。 6. 調理技術、簡単な食品加工について、身につける。 7. グループで協力して実習に取り組む。 8. 安全に留意して実習を行う。	10 20 30				10 20 30 40 50 60 70	
衣生活科学概論	生活のなかの衣料に単に、歴史、洗濯、乾燥、縫製、染色、洗淨、管理等に関する基礎的な事項を解説する。	1. 衣料用素材の種類と特徴を説明できる。 2. 繊維素材の性質と布地の性質を説明できる。 3. 品質表示の意味を説明できる。 4. 目的に合った衣料を選択できる。 5. 洗剤の正しい使い方を指導できる。 6. 衣生活を科学的な目で捉えることに関心を持つ。 7. 授業だけのことで終わらせるのではなく、日常生活に生かせる。	10 20 60 70				10 20 30 40 50	
衣料素材論I	まず、物理、化学の基礎知識を復習した上で、衣料用のさまざまな繊維について、構造、比重、弾性、保水性、洗濯性、帯電性等の基本的な性質、特徴を解説する。	1. 繊維素材の性質、特徴を科学的に説明できる。 2. 繊維素材の性質と布地の性質を関連づけられる。 3. 目的、意識せず着用している衣料を科学的な目で捉えることに関心を持つ。 4. 日常生活のなかの事象を科学的な目で捉えることができ、自前に応用されている物理や化学を実感することができる。	30				10 20	
衣料素材論II	化学繊維の発展の歴史を述べ、その上で、最近のいわゆる機能性繊維や高感性繊維について紹介し、その特徴および機能発現の機構を講義する。	1. 化学繊維の起り点を説明できる。 2. 機能性繊維、高感性繊維の機能発現の機構を説明できる。 3. 機能性繊維、高感性繊維の機能を効率よく発揮させる方法を自分で考えることができる。 4. 世界の最先端をいく日本の繊維技術について関心をもつ。	20 30				10 20 30	
繊維被服論(被服製作実習を含む)	被服分野の教材の基礎となる被服の立体構成を取り扱う。基本パターンからさまざまなデザインへの展開方法およびデザイン技法を学ぶ。	1. 被服の立体構成に関する基礎知識と技能を習得する。 2. 基礎パターンから様々なデザインへの展開方法がわかる。 3. デザインの基礎となる発想力を磨く。	10 20 30				10 20 30	
デザイン概論	生活を取り巻くあらゆる「もの」には、何らかのデザイン意志が反映され、造形されている。時代、地域、民族、集団あるいは個人などいつの時代の何れに育まれてきた感性や意識が折り重なって、形に生命が与えられ、それ以外のもの、無機質な表情を見せます。ここでは身体を取り巻くものも身近な服飾や生活小物を対象として、デザインする立場から、個人の内面にあるイメージを外に化させるトレーニングを行う。	1. 言葉遊び、ブレンストレーミング、自由な描写を通して、自己の内面にあるものをこだわりなく表出できる。 2. テーマに基づくデザインワークにおいて、豊かな発想が生み出せるように事例研究ができる。 3. 現代ファッションに関してグローバルな視点とローカルな視点の両方から理解できる。 4. 自己の表現の立場を認識できる。	30				10 20 30	
色彩科学概論	色彩は、ファッションにとどまらず、住居設計、室内インテリア、家電製品、小物、さらには東洋思想にいたるまで、すべての物に関わるものである。この講義では、まず基本となる、光と色の物理的性質およびその測定方法と表示法を解説し、色覚、色知覚、色彩感覚および色の心理的効果について口述する。	1. 色の物理性を説明できる。 2. 表色系を体系的に説明できる。 3. 配色の基本を説明できる。 4. 配色の方法を分類できる。 5. 色彩がもたらげる感情効果を指摘できる。 6. 日常生活にあるものを色彩配色の観点から配座する。 7. 自分の色彩感覚を磨くとともに、日常生活に生かす。	50 60 70				10 20 30 40 50	
住生活科学概論	今日の住生活には便利さや快適さとあわせて、地球環境への影響が少なく、持続できることが求められる。住生活の諸側面から生じる問題や課題をとりあ、それらに対処・実践する方法やよりよい住生活の仕方を学ぶ。住生活が生活財や住居空間、住居環境などに関わり、住生活の向上のためそれらとの関係の改善が必要なることを理解する。そして、よりよい住生活を住生活様式として築いていくための課題を考える。	1. 住生活の諸側面からの一般的な課題について説明できる。 2. 生活財を購入、利用、廃棄する際に留意する点のわかる。 3. 住生活に関する調査結果をもとに、改善すべきことを考察できる。 4. 生活様式がもたらげる地球環境や持続性への影響を判断できる。 5. 住生活にとどまらず、食生活や衣生活を含んだ生活全般の改善に関心を広げ、実践できる。 6. 自らの住生活に引き寄せて思考し、主体的に住生活の改善をはかろうとする。	10 20 30 50 60				10 20 30 40 50 60	

住居科学(健康を含む)	住生活の向上のために、住空間の構成や住環境の制御方法の理解を深めることを目的とする。住まひの発展や多様な住まひ方を通して、現代の住まひと住生活の課題を学ぶ。あわせて、健康や安全から住まひの環境を点検し、子どもや高齢者に配慮した住居の計画、地域環境と理解を深めたい。	1. 住まひの歴史と住まひの発展から、住まひの発展の背景を理解する。 2. 健康や安全の面から現代の課題を理解する。 3. 住まひの健康や安全性の判断ができる。 4. 子どもや高齢者の特性から、その必要な空間条件を考えられる。 5. 住まひと地域環境との関係や、消費者問題・住宅政策など社会との関係にも関心を広げられる。 6. バリアフリーなど社会の動きを主体的につかむ。 7. 知識や思考力を自らの住まひと住まひ方に生かし、よりよい住まひ方を積極的に追求する。 8. 子どもや高齢者を含んだ家族のニーズを理解し、それを両取りに表現できる。	40 50 60 70 80	10 20 30 40 50 60 70 80			10 20 30 40 50 60 70 80
居住環境論	住まひ、地域環境における健康や福祉の課題と対策について学ぶ。住まひや地域の環境と健康との関わりを学び、健康な生活のための居住環境のあり方を考える。次に、高齢者や障害者に必要な空間・環境条件を考え、これからの福祉に求めらるる住まひや地域の環境について理解を深める。	1. 居住環境が健康に関わること、広い環境との相互関係も有ることやその関係を説明できる。 2. 福祉の観点から、居住環境に求められることが説明できる。 3. 健康のため、広域環境への影響を少なくするための居住環境の条件を提案できる。 4. 住まひや地域でのバリアフリー・高齢者配慮の進め方を考察できる。 5. 身近な居住環境での問題を認識し、社会的な取り組みも参考にして、改善方法を提案できる。	10 20 30 40 50	10 20 30 40 50			10 50
住居設計	家庭生活のためのよりよい空間創造の力を養おうとする授業である。住居設計の手順や方法を学習し、想定した家族構成や必要のための住居を構築する。その設計図を作成するとともに、さらに模型で表現する。	1. 住居設計の手順、方法を実際に使って製図することができる。 2. 居住空間に求められる条件や必要な広さを説明できる。 3. 想定した家族のニーズを必要な空間に置きかえることができる。 4. 空間や家具などを模型に表現することができる。	20 30	10 20 30 40			10 20 30 40
住空間デザイン論	住空間デザインのあるべき姿を考察することをめざし授業を展開する。「生活の場」に求められている基本的な諸条件について詳しく、住空間デザインの果たすべき役割の重要性について学習を進めてゆく。	1. 住空間の機能的要素を説明できる。 2. 住空間デザインの手法について説明できる。 3. 設定された条件の中でエレメントの調整や効果的な色彩を示すことができる。 4. 住空間の設計を求められる図面に表現できる。	30	10 20 30 40			
生活論総合演習	この授業では、これまでの知識を基に衣食住に関する理化学実験、食生活調査におけるデータの収集・解析方法、さらに住生活・地域生活の問題や工夫をめぐらした基礎的調査方法を概観する。一方、専門的な研究室ゼミ、卒業研究の選択の手助けとなるように配慮した内容としている。	1. 生活上の現象・事象について、科学的・統計学的に理解、説明できる。 2. 生活上の問題点を自ら抽出し、改善、改良、向上するためのはたどうすればよいかを考えることができる。 3. 生活上の身の回りに起こっていることを単に受け入れるのではなく、「どうして?」という疑問を抱くことができる。 4. 言われたからするのではなく、自ら積極的に演習・実験に参加する。 5. 他人に対して協力的・建設的態度がとれる。 6. 基本的な実験器具・機器および統計を扱える。 7. 実験内容、調査内容や自分で考察した内容をレポートとしてまとめる。	10 20 30	10 20 30 40 50 60 70		10 20 30 40 50 60 70	
生活メディア論	パソコンによる情報収集、数値データのグラフ化、統計処理、プレゼンテーション(発表)を行う。	1. 基本統計量を説明できる。 2. 表計算ソフトの関数を利用できる。 3. フラワーが必要な情報を採り出すことができる。 4. 表計算ソフトを使ってデータを解析できる。 5. 適切なプレゼンテーションを心がける。 6. 他人のプレゼンテーションに対して適切な評価ができる。 7. 表作成・グラフ作成ができる。 8. プレゼンソフトを使って自分の考えを伝えることができる。				10 20 30 40 50 60 70	10 20 30 40 50 60 70 80
消費生活概論(家庭経済学を含む)	我が国の消費生活の姿容、家計について理解するとともに現代の消費者問題の背景・要因について理解する。その上で、真に豊かな消費生活文化・様式を創造する自立した消費者について学習する。	1. 授業で学んだことを理解することが出来たか。(家計、消費者問題、消費者政策、自立的消費者など) 2. 現代の消費者問題について、その要因・背景を明確にすることが出来たか。(消費者の権利・責任の観点から) 3. 消費者問題に関心・意欲を持つことが出来たか。 4. 授業の態度が真面目であったか。 5. 課題レポートが分かりやすく書かれていたか。	20	10 20 30 40 50			10 20 30 40 50
児童学	乳幼児の身の発達について講義する。保育記録とVTR記録をもとに、幼児の特性に応じた関わり方を学ぶ。絵本を紹介しながら、子ども理解について考える。	1. 幼児期の発達の特徴がわかったか。 2. 幼児の行動の見方が広がり、かわり方について考えることができたか。 3. 幼児や子どもに対する関心が深まったか 絵本を通して関わり方を学び、児童文化に意欲や関心を抱くようになったか。	20	10 20 30			10 20 30
保育学(実習及び家庭看護学を含む)	幼稚園における幼児の行動理解と保育のあり方について、保育記録に基づいて学ぶ。家庭看護及び幼児の教育について実習を行う。幼稚園にて、幼児の行動観察・保育実習を行う。	1. 保育に関するテキストを読んで、内容を理解したか。 2. 家庭実習において適切な判断がなされ、行動できたかどうか。 3. 幼児教育について、意欲や関心が高まったか。	30	10 20 30			10 20 30
家族生活論(家族関係学を含む)	現代家族の理論と実態について取り上げる。家族と社会の関係、家族内部の人間関係(夫婦関係・親子関係・きょうだい関係)およびその病理(DV・児童虐待など)について講義する。	1. 現代家族の置かれた状況、課題について理解する。 2. 家族問題についての自分なりの見解を持ち表現できる。 3. 家族問題に関する関心を持つ。	10 20	10 20 30			10 20 30
生活工学概論	安全で豊かな生活を向上させるため、家庭においては種々の機器や電気製品が利用されている。それらの機器や電気に関する基本的な法則、家庭用機器と電気機器の構造と機能、安全な使い方などについて講義する。	1. 家庭機械、家庭電気機器の仕組みを理解し、説明できる。 2. 家庭における機器を安全に使いこなせる。 3. 家庭で用いる機器について科学的見方で分析し説明できる。 4. 家庭での機械、電気的作用に関心を持ち、問題意識を高めることが出来る。 5. 家庭生活や社会への機械、電気的作用、影響について主体的に考えることが出来る。	40 50	10 20 30 40 50			10 20 30 40 50
国際文化I	世界各地の農業地帯に深い関心を持ってきた歴史の上に作られた農法や文化そして暮らしのあることを説明する。	1. 世界の農業地帯を説明できる。 2. 農業文化の多様性を説明できる。 3. 身近な農業文化に関心を持つ。	20	10 20 30			
国際文化II	ヨーロッパ文化の根本問題を主にニーチェの思想によって明らかにする。	1. ヨーロッパ文化の基本的思想的理解を得ること。 2. ヨーロッパ文化について考え、判断する力を養うこと。 3. ヨーロッパ文化の基礎的思想的理解への関心を喚起すること。 4. ヨーロッパ文化の真摯な理解の態度を養うこと。 5. ヨーロッパ文化の理解を自分の言葉で表現する力を養うこと。		10 20 30 40 50			
卒業研究	卒業研究は、4年生になってからだが、その前期として3年後期から「衣」「食」「住」の各研究室(指導教員)に所属し、文献購読、調査・分析の方法、論文の書き方等について学び、卒業研究の心構えを構築する。具体的な卒業研究は、4年前期に開始し、翌年、1月末日の卒業論文の提出、2月中旬の発表会での発表をもって終了する。	1. 興味をもった内容を具体的な研究テーマとして設定できる。 2. 各自の研究テーマについての社会的な意味やこれまでの先行研究の概要・問題点を把握できる。 3. 具体的な研究手段を構築し、それを実施できる。 4. 各自の研究テーマについて、調査結果に基づいて、自らの考えを論理的に述べて、また、わかりやすく述べることができる。 5. 研究テーマに関わる諸問題について、広く関心をもち、主体的に考えることができる。	20	10 20 30 40 50		10 20 30 40 50	
G P項目別到達度判定方法(具体的に記述・簡条書表) 総合的G P到達度判定方法(具体的に記述・簡条書表)							